

平成 30 年 5 月 24 日現在

機関番号：15501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370540

研究課題名(和文)九州方言音韻現象の方言崩壊ヒストリーに基づく方言形成シナリオの構築

研究課題名(英文) Construction of the Dialect-formation Scenario based on the Dialect-destruction of Phonological Phenomenon in the Kyushu Dialect

研究代表者

有元 光彦 (Arimoto, Mitsuhiro)

山口大学・国際総合科学部・教授

研究者番号：90232074

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、九州方言における音韻現象(テ形音韻現象)を対象として、(1)新たな言語データを収集すること、(2)方言タイプを確定すること、(3)方言崩壊・方言形成に関する理論的研究をすることである。言語データについては、宮崎県南部・中西部、長崎県対馬市の現地調査を実施し、収集した。これを分析した結果、各方言をいくつかの方言タイプに分類できた。さらに、そこには方言崩壊が進行している様相も発見できた。

研究成果の概要(英文)：An aim of this research, which target is phonological phenomenon in the Kyushu dialects (Te-form Phonological Phenomenon), is as follows; (1) To collect new language data, (2) To decide the dialect type, (3) To make a theoretical research on destruction and formation of dialects. In this study, I researched dialects of southern and mid-western region in the Miyazaki prefecture, and Tsushima-city in the Nagasaki prefecture. By the analysis of these data, each dialect is divided into some types. Also, I discovered a state on the progress of dialect-destruction.

研究分野：日本語学, 方言論, 音韻論

キーワード：九州方言 テ形 音韻現象 方言形成 方言崩壊

1. 研究開始当初の背景

「方言がいかにかたちづくられてきたか」という問題は、学問としての方言研究が始まった頃からの重大な問題であった。この問題を解決するために、「方言圏論」(柳田國男等)、「方言孤立変遷論」(金田一春彦・楳垣実)、「多元的発生の仮説」(長尾勇)など様々な考え方が現れた。しかし、これらの考え方の焦点は、中央語が地方にどのように伝播するかといった、方言形成プロセスの初期段階における問題であった。その後、「中央語再生モデル」(小林隆)と呼ばれる方言圏論と方言孤立変遷論との複合モデルが現れ、さらに近年では、送り手側(中央)の論理だけでなく、受容・拒否といった受け手側(地方)の論理、即ち伝播に際しての個人の認知行動についても議論され始めている。しかし、現在までの方言形成論には重要な問題が置き去りにされている。それは、次のような問題点である。

- (1)対象領域が、単語や語彙に限られていること。
- (2)方言形成プロセスの全体像が解明されていないこと。
- (3)方言形成プロセスに対し、十分な検証がなされていないこと。

そこで、研究対象を体系性のある研究領域まで拡大し、方言形成プロセスを総合的に構築していく必要がある。しかも、斬新な方法論によって、その仮説を検証できる仕組みを作ることが、「方言形成論」という研究領域を進展させるに必須であると考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、九州方言における特徴的な音韻現象(テ形音韻現象)の詳述をツールとして、そこに記述される方言崩壊ヒストリーを基盤とすることによって、方言形成シナリオを体系的に構築することにある。

ここでは、音韻現象の共時的な記述的研究だけでなく、方言崩壊ヒストリーや方言形成シナリオを説明するための通時的な理論的研究を推進する。さらに、構築された方言形成理論を検証するために、構成論的なシミュレーション実験を実施し、その検証方法を確立することを目指す。

3. 研究の方法

具体的には、次に挙げる4項目の問題を解明していく。

- (1)九州方言の音韻現象に関する詳細なデータ収集・記述
- (2)方言崩壊ヒストリーの記述
- (3)方言形成シナリオの構築
- (4)方言形成シナリオの検証

(1)においては、九州方言の音韻現象の1つ

である「テ形音韻現象」(「～て(きた)」というような動詞テ形に現れる特異な形態音韻現象)を対象とし、2つの方言タイプが地理的に接触している地域のデータを重点的に収集する。このような接触地域では、すでに有元光彦(2007)で言う「共生タイプ」(2つの異なる方言タイプが共生している、即ち伝播の途中段階を表す中間的な言語状態を持つ方言タイプ)がいくつか観察されている。この方言タイプには、方言形成プロセスを解明するための重要なキーが隠れていると考えられる。従って、今回のデータ収集では、調査地点を接触地域に限定して重点的に収集していくことによって、新たな共生タイプの発見を目指す。

(2)においては、テ形音韻現象で起こっている部分的な体系の崩壊をヒストリーとして記述していく。「方言崩壊ヒストリー」とは、本来均衡性を保持しているはずの体系に崩壊が進行しているのはなぜか、という通時の問題を、より詳細に理論化したものである。

(3)においては、(1),(2)の結果に基づき、方言形成全体のシナリオを仮定していく。「方言形成シナリオ」とは、方言形成プロセスをさらに詳細に理論化したものである。理論化においては、生成音韻論、最適性理論、生物学的アプローチ等を利用する。

(4)においては、(3)で構築された理論を検証するために、構成論的な観点からのシミュレーション実験を行う。この実験は、科学研究費(No.16520281, 19652041)による研究成果報告書(有元光彦(2007, 2010))に結実した方法論を利用する。

また、当初の研究スケジュールとして、まず平成26~27年度には、言語データの収集・整理、及び方言崩壊ヒストリーの記述に重点を置いていた。平成28~29年度には、理論的な研究、即ち方言形成シナリオの構築を、そして平成29年度には理論の検証を実施する計画であった。

4. 研究成果

(1)記述的研究

まず、九州方言の音韻現象に関する詳細なデータ収集・記述に関しては、「テ形音韻現象」の方言タイプにおいて、2つの異なる方言タイプが接触していると予測される地点、及び未調査の地点を調査することができた。

本研究による調査地点は、宮崎県では、串間市、日南市、児湯郡西米良村、東臼杵郡椎葉村、西臼杵郡高千穂町、そして長崎県では対馬市上県町佐護、対馬市厳原町豆駝である。これらの地域における動詞テ形を調査した結果、地理的に興味深い分布が現れた。方言タイプについては、次のように記述できる。

串間市・日南市方言

串間市、日南市の方言タイプは隣接する鹿児島県南部の方言タイプとは異なるものが現れた。この方言タイプは、筆者が「非テ形現象方言」と呼んでいるもので、いわゆる共通語と同じ分布を示す方言タイプである。宮崎県南部の方言タイプは、熊本県中東部の方言タイプと同じであることが判明した。

西米良村・椎葉村方言

宮崎県中西部である、西米良村、椎葉村の方言タイプも、熊本県中東部のものと同じであった。すなわち、「非テ形現象方言」である。これは地理的な隣接性によることが原因であると考えられる。

高千穂町方言

高千穂町の方言タイプは熊本県中東部のものとは異なり、大分県西南部と同じものが現れた。これは、筆者が仮定する方言タイプとしては、「擬似テ形現象方言」と呼んでいるもので、「テ」「デ」に相当する部分に「チ」「ジ」が現れるものである。同じ宮崎県内の地域であっても、方言圏が異なっているのである。

対馬市方言

対馬市においては、2地点とも独特な方言タイプが得られた。北部の佐護方言は「真性テ形現象方言」、南部の豆駝方言は「擬似テ形現象方言」であった。これらの方言タイプは、熊本県天草近辺に出現する方言タイプであるため、島嶼部という地理的な問題が関係しているのかもしれない。

今回の調査では、特に宮崎県内においては共通語と同じ方言タイプが見られるのではないかと予測していたが、おおよそ予測通りであった。しかし、西米良村、椎葉村を除き、各地域の方言タイプに揺れが見られることが気になった。各地域とも、ある程度方言タイプを確定することはできるのではあるが、いくつかの動詞グループにおいてイレギュラーな振舞いが見られた。

例えば、串間市方言では、非テ形現象方言という方言タイプの他にも、真性テ形現象方言に近いような形も出現している。また、日南市方言では、鹿児島県南部に広く見られる方言タイプと同じものが垣間見える。さらに、対馬市佐護方言では、擬似テ形現象方言のような形も少しだけ出現している。

このようなイレギュラーな分布から考えると、各方言でまさに方言崩壊が進行しているのではないだろうか。単なる語形の消失だけではなく、テ形音韻現象というシステム自体が崩れつつあるように思われる。ただ、そうであるとすると、システム内のどこから、どのように崩壊が進行するのかということが問題となる。この問題については、現時点では判明していない。現在までに蓄積した九

州全域のテ形音韻現象のデータを改めて分析する必要があるが、それは今後の課題である。

(2)理論的研究

上記のような言語データの不規則性によって、方言崩壊ヒストリーの記述や方言形成シナリオの構築などの理論的な研究が進んでいないことは否めない。この不規則性は、単なる調査ミスではなく、方言崩壊や方言形成に重要な問題を提起してくれるのではないかと予測しているが、現時点では解明できていない。従って、様々な理論的な枠組みによるテ形音韻現象の分析、そしてそれに基づいた構成論的なシミュレーション実験については、今後の課題とせざるを得ない。しかし、言語データを新たに蓄積できたことは評価できると考える。

(3)研究成果報告書

以上の研究成果については、研究成果報告書『九州方言におけるテ形音韻現象の記述的研究』(平成30年3月、131ページ)を冊子として作成している。

ここでは、まずテ形音韻現象の記述として、調査等概要、論文(再録)、言語データを記載している。また、テ形音韻現象の方言タイプとして、先行研究で判明している九州地域の方言タイプ、及びその地理的分布を示した方言地図を挙げている。

以上の記述によって、言語データの収集・分析、方言タイプの確定、九州全体の分布状況の解析に関しては、大きな進展が見られた。

(4)付記

現地調査にあたり、各市町村の教育委員会、公的機関、及びインフォーマントの皆さんに深謝いたします。

なお、本研究における調査の際、熊本県や鹿児島県における自然災害の影響によって、計画立案ができない状態があったことを付記しておきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

有元光彦、鹿児島県本土西部・南部方言におけるテ形音韻現象の記述、研究論叢(山口大学教育学部)査読無、第66巻第1部、2017、15-29

有元光彦、共生タイプについて 九州西部方言の動詞におけるテ形音韻現象を対象として、方言の研究(日本方言研究会)、査読有、第1号、2015、185-208

有元光彦、タイプ W1 方言と方言崩壊 九州南部方言における動詞テ形音韻現象、九

州大学言語学論集，査読無，第 35 号，2015，
299 328

有元光彦，天草諸島方言の多様性 御所浦
島方言・獅子島方言の動詞テ形音韻現象，
研究論叢（山口大学教育学部），査読無，第
64 巻第 1 部，2015，31 46

〔図書〕（計 2 件）

有元光彦 他，ミネルヴァ書房，はじめて
学ぶ方言学（井上史雄・木部暢子編著），2016
年，155-164

有元光彦 他，ひつじ書房，柳田方言学の
現代的意義 あいさつ表現と方言形成論（小
林隆編），2014，189 207

6．研究組織

(1)研究代表者

有元 光彦（ARIMOTO, Mitsuhiro）

山口大学・国際総合科学部・教授

研究者番号：9 0 2 3 2 0 7 4